

夏目漱石

坪内博士と
ハムレット

坪内博士とハムレット

上

一週日にわたる「ハムレット」の公演は文壇最近の出来事として芸術に関係ある多数のものに興味を惹き起した新らしい色彩である。余よも招待を受けて、観に行つた。ちよつとした差支さしつかえのため、後おくれて席に着いたのみならず早く席を立つたから、全部の連続した光景が、目にも耳にも展開的に収まらなかつたのは遺憾であるけれど

も、長い巻物の中間だけはたしかに鮮明に切り抜いて宅へ持って帰った。その印象の中には坪内博士にも登場の諸君にも面と向っては言いにくいところがだいぶあるので、少なくとも公演中はと差控えていた。今これを公けにするのは、博士の熱心と諸君の努力に対する余の敬意に、誠実なる内容を与えんとする心苦しき試みにすぎない。

根本的に言うると、「ハムレット」は英国でできたもの、三百年も昔に成ったもの、無韻ではあるが一行五^{じょう}疊の律から割り出したいわゆるブランクスで書き綴られ

たもの——すでに外面的にもこれほどの特色を具えてい
る以上は、今日の日本に生れた我々のこの劇に対する態
度が、鑑賞的であるべきか、はた批評的であるべきかは
読まぬまえからほぼ極^きまるべきはずである。という意味
は、「ハムレット」と我々が必ずびたりと一致すべきも
のとの迷信に近い信念をもって読みはじめるよりは、む
しろ我々は我々としてどこまで「ハムレット」に引っ張
ってゆかれ得るだろうかという批判的態度で、研究に取
り掛らなければなるまいと論定したのである。

これを事実^{じじつ}に訴えれば、余の意味はさらに一倍の光度

を高め得るかもしれない。あの一週間の公演の間に来た何千かの観客に向つて、自分が舞台の裡に吸収せられるほど我を忘れて面白く見物してきたかと聞いたら、さようと断言し得るものはおそらく一人もなからうと思う。それほど劇と彼等の間には興味の間隔があつたのだと余は憚りなく信じている。

それではその間隔を説明しろと坪内博士が言われるなら、余は英国が劇と我等の間に挟まっていると答えたい。三百年の月日が挟まっていると答えたい。使い慣れない詩的な言葉がのべつに挟まっていると答えたい。要す

るに沙翁という一人の男が間へ立って、すべて鑑賞の邪魔をしているのだと憚なく言い切りたい。我等と劇の間に寸分の隙間なく、二つがびたりと合うならば、その劇に英国だの、三百年の昔だの、詩的な言葉だのという面倒な形容詞は要らぬはずである。「ハムレット」はただの「ハムレット」で十分通用しなければならぬはずである。

坪内博士の訳は忠実の模範とも評すべき丁重なものと見受けた。あれだけの骨折はほねおり実際翻訳で苦しんだ経験のあるものでなければ、ほとんど想像するさえ困難である。

余はこの点において深く博士の労力に推服する。けれども、博士が沙翁に対してあまりに忠実ならんと試みられたがため、ついに我等観客に対して不忠実になられたのを深く遺憾に思うのである。我等の心理上また習慣上要求する言語は一つも採用の榮を得ずして、片言隻句へんげんせつくの末に至るまで、ことごとく沙翁の言うがままに無理な日本語を製造された結果として、この矛盾におちいつ陥たのはいかにも気の毒に堪えない。沙翁劇はその劇の根本性質として、日本語の翻訳を許さぬものである。その翻訳をあえてするのは、これをあえてすると同時に、我等日本人を

見棄たも同様である。翻訳は差支ないが、その翻訳を演じて、我等日本人に芸術上の満足を与えようとするならば、葡萄酒を正宗と交換したから甘党でも飲めないことはなからうと主張すると等しき不条理を犯すことになる。博士はただ忠実たる沙翁の翻訳者として任ずる代りに、公演を断念するか、または公演を遂行するため、不忠実なる沙翁の翻案者となるか。二つのうち一つを選ぶべきであった。

下

沙翁の作物さくぶつが自然の鏡に映る明あきらかなる影のごとくに無理のないものだとして、一概に西洋人のいうとおりを真に受けて、自己の味覚をわざと客位に置いては、我々の不見識になるばかりか、現にお互の損である。沙翁を写真の泰斗たいとのように言い触らすのは真まことでもあるがまた大いなる嘘でもあると余は主張したいくらいに思っている。なるほど喜怒哀楽の因果的に流露する段落関係には普遍の趣を具えているかもしれぬが、その喜怒哀楽の中に

盛られる表現には寄り付けられないほどに不自然でかつ突飛なものがある。今日の日本人はむろん、今日の英国人もむろん、当時エリザベス朝の人間といえども決してこんな思想を意志疏通の道具として用いはしなかつたろうと考えられる。

この不自然で突飛な、我々とはもつとも人間的交渉の少ない思想が、すなわち沙翁の詩想なので、平凡と常套を脱した普通以上の別世界に行わるべき巧みなる表現なのだという事実が気が付くならば、いわゆる沙翁劇なるものは、普遍なる脚色の波瀾から観客に刺激を与えるほ

かに、一種独特の詩国を建立して、その詩国の市民でなければとうていこれを享樂する権利を有しておらぬと規定されたむずかしい条件付の芝居であるという事が解るだろう。

したがって日常の人間としてもなおかつ鑑賞の余地ある脚色にのみ追伴して、同時に一方の条件を充たすことを忘れたもの、または充たすに意なきものには、一種いふべからざる不徹底な齒痒はがゆさと、片付けることのできない矛盾の苦痛を与えざるを得ない。我等はまったくこれがために悩まされたのである。けれども坪内博士と登場

の諸君は、それほど詩的な表現をほしいま恣まにする沙翁に跟ついて来得ない我等のほうが、趣味の程度において稚ないのだと言われるかもしれない。余は特にそこを弁じておきたいのである。

余の経験に訴えらると、沙翁の建立したという詩国は、欧州の評家が一致するごとくに、しかく普遍的な性質を帯びているものではない。我等が相応にこれを味わいうるのは、年来修養の結果として、順応の境地を意識的に把握はそくした半ば有意の鑑賞である。縁の遠いところになると依然として我等と沙翁との間にはなんらの血も脈も共通に

搏うつてはいない。そのうえ我等は字面じづらに祗徊ていかいして、その内部に潜在する情味を掬きくしながら徐々と進行するものである。単なる俳句のごときですら詩と名のつく以上は広告を読み流す勢いきおいで進行しては頭も情緒も字義に伴う余裕を見出みいだし得ないのは経験の教えるところである。まして本来から己おのれを異境の土に移しての鑑賞に、日常談話の速力は、汽車で箱根を馳かけ抜けるよりも無理な見物である。今の普通教育を受けた英人にすら沙翁の言葉は舞台の文句としてはあまりに詩的で、ほとんど意義を構成していないところが多い。もしこの不足を補うにアクセ

ントの特別な組織から生ずる朗詠吟誦ぎんしやうの調子に伴って
 起る快感をもつてしなかつたら、彼等はほとんど長時間
 の席に堪えないだろうと思う。沙翁は詩人である、詩人
 の言葉は常識以上の天地を馳け回めぐっている、と許した以
 上、これを口にするものもまた常識以上の調子で観客を
 釣り込む魔力と覚悟とを具えなければならぬ。要する
 に沙翁劇のセリフは能とか謡とかのような別格の音調に
 よりて初めて、興味を支持されべきであると極きめて懸から
 なければならぬ。ここに注意を払わないで、「晴嵐梢せいらんこざえ
 を吹き払って」というような言葉を、「おいちよつと来

てくれ」という日常の調子で遣^やつては、双方とも崩^{くず}れに終るだけである。

西洋でも沙翁劇は今なおしばしば演ぜられる。その都度評家の苦情は、今の役者が詩を理解しないで、普通の散文と選ぶところなく口から出任せに遣^やつて退^のけるから、せつかくの美しくしいものを台なしに打ち壊してしまふというにある。すでに音律の整った原詩に対してすらこういう非難がある。坪内博士の「ハムレット」は写実を遠^{とおほ}かる埋合わせとして沙翁の与えたる詩美を、単に声調のうえにおいてすら再演することができなかつたた

め、我々は高雅な幻境に誘いざなわれる心持にいくぶんでも
なり得ず、また普通の人間を舞台の上に見るような切実
な面白味を味わい得なかつたのである。

(明治四四・六・五一六)

日本文学電子図書館

坪内博士とハムレット

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第8巻」角川書店

昭和42年10月10日5版発行

日本文学電子図書館